

■肢体不自由のある子どもたちへの実践事例

マルチメディアDAISY図書が身近な読書活動の一つとして活用されることを目指して

神奈川県横浜市立上菅田特別支援学校
岩崎 有美

本校の読書活動への取り組み

本校は、肢体不自由のある児童生徒が総勢161名（小学部47名、中学部50名、高等部64名）が在籍し、自立活動を中心とした学習、教科領域を合わせた指導を中心とした学習、下学年の教科を中心とした学習、該当学年の教科を中心とした学習と実態や発達段階の幅は広くさまざまです。

本校には図書室のほかに、みんなが行き交う場所に書架を設置し、大型絵本を配架した、誰でもいつでも読める「ひだまりコーナー」という場所があります。

また、図書室からのお知らせや新刊紹介などで活用している掲示板が3か所あります。

マルチメディアDAISY図書を図書室に置くようになって約10年が経とうとしています。本テーマでの実践も4年目になります。今年度もマルチメディアDAISY図書の新刊を校内で活用できる教材サーバーに入れて全校で共有できるようにしました。

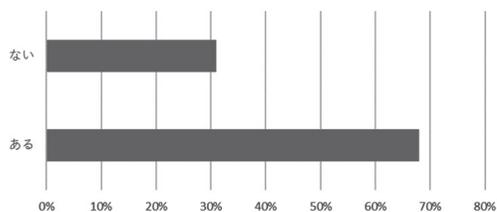


DAISY文庫ファイル

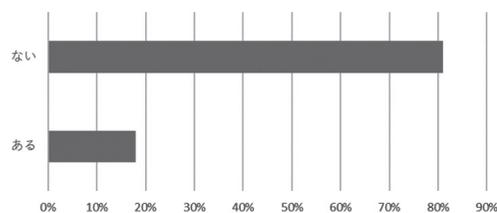


各年度のファイル

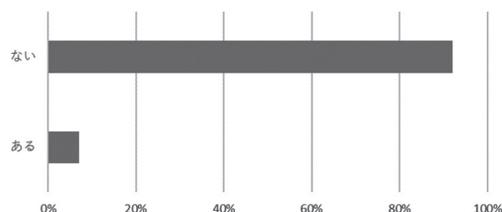
また、学校司書がテーマごとの特設コーナーを設ける際に、マルチメディアDAISY図書の中の本も含めて紹介しました。テーマを「春のパン祭り」として、『パパンがパン』『大どろぼうはおかしなサンドイッチやさん』『ぺったん！サンドイッチ』を紹介しました。



マルチメディアDAISY図書を読んだことがありますか



マルチメディアDAISY図書を授業で活用したことがありますか



一人1台タブレット端末が配布されたことで利用に変化がありましたか

毎年子どもたちの学習に関わる職員に対してアンケート調査を実施していますが、マルチメディアDAISY図書に対する認知度は少しずつ上がってきていて、今年度は83%とほとんどの職員が知っているとの回答でした。

しかし、授業での活用については、「ない」が81%でした。

また、GIGAスクール構想により、一人1台タブレット端末が配布され、マルチメディアDAISY図書の利用に影響

があったかという質問に対しては、92%が「影響なし」という回答が返ってきました。個人でタブレット端末を使うことで、読みたいときに読みたい本を読むことができるようになったという意見がみられました。

また、教材サーバーからタブレット端末へのマルチメディアDAISY図書のダウンロードの方法がわからないという意見もあり、年度初めに周知することが、今後も課題と感じられました。

活動の様子

上記に行ったアンケートの項目に「どのように活用していますか。」という項目を設定したところ、以下のような回答が得られました。

「本だと好きなものしか読まないなどこだわりがあるが、マルチメディアDAISY図書は動画のように読み進めることができる」

「マルチメディアDAISY図書だと音声に聞き入り、画面に注目することができた」

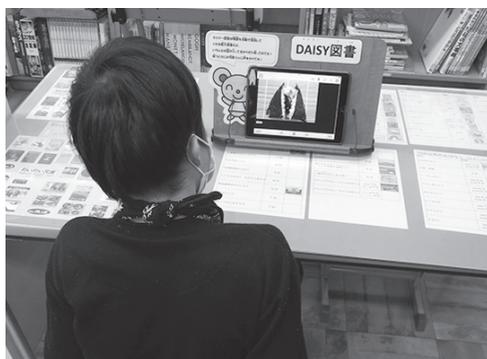
「独特な音声やリズムに興味津々で楽しんでいた」

一番興味深い回答は、「読書の仕方、朗読の仕方について伝えるために活用した」というものでした。読書をするだけでなく、読書をするための学習にも使えることを、このアンケートで知ることができました。よく図書室を

利用する高3の男子生徒は、目次から自分の好きな本を選んでタブレット端末を操作し、マルチメディアDAISY図書での読書活動を一人で行えるようになりました。



生徒の様子『うしろにいろのだあれ』



生徒の様子『おにぎり おむすび』

子どもたちと教員が、それぞれタブレット端末を持つようになって、「いつでも手元で見られるようになった」

「子どもたちが読みたい本を選んで読めるようになった」

「いつでもどこでも好きなタイミングで読書活動を行えるようになった」

という回答がありました。

現在は、クラスで使用できるタブレット端末にしかアプリが入っていないため、一人ひとりのタブレット端末ではまだ活用することができません。校内のICTと連携を図って、少しずつでも、子どもたち一人ひとりの手元でマルチメディアDAISY図書が活用できるようにしていきたいと思います。

アンケートの回答の中で、とても興味深い活用方法がありました。マルチメディアDAISY図書を使って、読書の進め方や朗読の仕方を学習するために、授業で活用したという回答がありました。読書をするだけのマルチメディアDAISY図書ではなく、読むための学習に活用するという私にはなかった視点に気づかせてもらいました。

今後も継続して多くの子どもたちや教職員に知ってもらい、活用しやすいように学校司書やICTなどと連携を図りながら進めていきたいと思います。